デイヴィッド・ロラソン
『イングランドと大陸における王権の起源』翻訳と解説

訳：朝　治　啓　三

本稿は以前に取り組んでいた研究課題に基づいており，その成果は『国王について：初期中世の国王の役目』と題する書物となって近々公刊されます。そのため未完成の状態で皆様に公開することには，いささか躊躇を感じております。他方，その書物の目的は，現時点ではかなり分散した状態である王権についての概念をつきあわせることであり，また王権についての起源と特性についての基本的論点の上に，その諸概念のピント合わせをすることであります。またその書は，議論を活発にすることで，この主題へと近づく様々な方法を相互に豊かにしようとする試みでもあります。従ってここ日本の聴衆に向かって，まだ初期段階にある書物の構想を報告することも，必ずしも的はずれであるとは思えません。日本で私は，だいたい四百年から千百年に至る初期中世のヨーロッパ史の専門家の意見を知りたいのと同時に，私が論じようとしている概念と，日本の早い時代の王権或いはアジアの他の地域の支配者概念とを比較してみたいのです。

よく知られていますように，初期中世ヨーロッパ史は西半分はローマ帝国の末期頃から，つまり五世紀の第３四半期の頃以来，大まかにいって国王によって支配されてきました。その当時ローマ帝国は一連の諸王国へと解体してゆきました。つまりスペインやガリア南西部では西ゴート王国，イタリアでは東ゴート王国ガリア北東部ではフランク王国，かつてのローマ帝国の属州ブリタニアではイングランド人やブリトン人の諸王国という具合にです。その当時の西ヨーロッパ史の叙述史料は国王の歴史に他なりません。例えば六世紀後半以降のトゥールのグレゴリウスによる『フランク族の歴史』は，第一義的には国王

についての叙述であり，特に国王たちの内輪もめについてであります[1;2;3]。またベーダの「イングランド国民教会史」は七三一年以後について国王について何よりも関心を示しているのみならず，草稿の段階ではそれは，ある国王すなわちノーサンブリア王チェオルウルフに対して，注釈と改訂のために送られたものだったのです[4;5]。さらに西ローマ帝国の版図を越えた地域，特にアイルランドにも国王がいて，そこでは史料は驚くほど豊かです[6;7;8;9]し，おそらくスカンディナヴィアにも国王がいたようです。とはいえこの点に関する史料は八世紀以後になってようやく信頼にたるものであるといえるのではありますが。そのころにフランク人の著作家がスカンディナヴィアの国王たちの活動を報じているからです[10]。

ローマ期以後の西ヨーロッパに広く見られた，また初期近代や近代にまで下って影響を及ぼし続けた，王権というこの機関 institution の起源は何であったのでしょうか。この問題を論じる際に単純化するという危険をこの十年ほど学者たちは冒してきたのですが，その解答に至る二つの可能性があるように私には思えます。それらは互いに排除し合うものではありませんが，にも拘わらず，お互いには異なっています。ですのでそれらを同時に議論することは，満足のいくやりかたとは思えません。

解答へ至る第一の可能性は，「イングランドと大陸における初期ゲルマン王権」と題して，一九七〇年にJ．M．ウォリス＝ヘイドリルがオクスフォード大学で行ったフォード講義の一連の内容の核心に近いものです[11]。これはポスト・ローマ期の西ヨーロッパ諸王国において認められる王権とは，本質的にはローマの外交的，軍事的活動が生み出したものである，というものです。もちろん五世紀後半以後これらの王国をうち立てたゲルマン人やケルト人の間にも，国王という存在は認められますが，それらはその後もそれらの人々を実際に支配するようになった国王とは，異なっており，後者は上述の如く多少なりともローマ帝国の意図的な活動によって作り出されたのです。

第二の可能性はかつてアイルランドの国王に関心を持つ学者たちに好まれた接近方法で，例えばD．A．ビンチーの *Celtic and Anglo-Saxon Kingship*[6]

がその例です。そして最近ではヨーロッパのその他の地域における王権に関して，エンライト Michael J. Enright の *Lady with a Mead Cup: Ritual, Prophecy and Lordship in the European Warband from La Tene to the Viking Age,*[12]，或いは *Sutton Hoo Sceptre and the Roots of Celtic Kingship Theory,*[13] という書物によって新たな刺激を与えられました。それは，我々が西ヨーロッパにおけるポスト・ローマ期の諸世紀のヨーロッパの国王たちの中に，本質的には大変に古い制度・機関を見出しており，その制度はローマ帝国に先行しており，国王と，ゲルマン的ケルト的異教の側面との間の近しい関係によって特徴づけられると見なしている，ということです。

本稿の目的はこれら二つのタイプの初期中世王権起源論の価値を評価することであります。そして入手可能な証拠が我々に一方よりも他方を好意的に評価させる程度を，見つけだすことです。もちろんこれを行うにあたって，我々は仮説というものが必ずしもお互いを排除し合うものではないことを認識しておかなくてはなりません。ローマ人は結局ある古い制度・機関を，あたかも新しい制度を創造したかのように形作ったのかも知れないというような場合です。

ここでは上記の二つのうち第二の方法，すなわち王権の異教徒起源という捉え方から始めましょう。この接近方法においては，出発点では人類学的方法をとらねばなりません。

J．G．フレイザーの『金枝編』[14] はかつては高度に影響力のある人類学の業績であり，その冒頭の書き出しは南イタリアにおける女神ディアーナ（ダイアナ）の祠のある場所ネミの森についての古典詩人ヴェルギリウスによる解説です。フレイザーはそれを次のように説明しています。

> その女神の聖職者は国王の称号を帯びていた。そして彼の職は王国と呼ばれていた。しかしその者が国王位に止まるのは一回きりであった。彼は逃亡した奴隷であって，先王を殺してその職を継いだのであった。そして彼はその地位を，他の主張者に対するたった一回の戦闘において証明することが出来る限りにおいてのみ，保持し得た。その森の中のある木から一本の小枝を切り取ることが出来るなら，いかなる逃亡奴隷であれ，聖職者と

戦う権利があり，先行者を殺し得たならば，彼がその者に代わって地位につき得た。

この箇所に関するフレイザーの解説は，その本全体の主題ですが，次のようなものです。

すなわち魔術師は本質的に自然物に関連する共鳴魔術を支配する。

次に永劫に魔術師は国王へと進展し，と同時に神へと進展する。（共鳴魔術は上記の木の役割を説明する。）

そして国王は女神と結婚するものと見なされるに至るのです（ここからネミの国王の役割はディアーナ女神に関しては，彼は彼女の夫である）。

フレイザーの研究は今では人類学者の間では過去のものと見なされています。しかし研究者たちが初期国王権における神聖さの sacral，或いは神々しい divine 機能を詮索し始めた二〇世紀のある時期には，大いに影響力があったので，その書について考察することは有益です。このことから史学史的に引き出される要約に関しては，そして特に出典の中に異教的起源を認識する基準に関しては，そして，それらを合わせた研究計画については参考文献を参照してください[15; 16]。

しかしこの主題で研究し，フレイザーに影響を受けている歴史家たちは以下の四点について証拠に焦点を当てているのです。第一，神に由来する王。第二，ネミの王のように後継者の犠牲となった王。第三，女神と結婚する王。第四，異教の神と結びつけられる王。これらを順に検討しましょう。

最初に，ある王が神に由来し，その結果自らを神であると，同時代人によって見なされていたのか否かという問いについてみましょう。イングランド王国に関しては，研究者たちは以下に見るように，様々な諸部族の王国の証拠を考察してきました。イングランドの諸部族の系図（例えばノーサンブリア，マーシア，ウエスト・サクソン，ケント王国など）は，その国の王をウォーデンに起源を有するものとみています。ウォーデンは通常，異教の神であるスカンディナヴィアのオーディンと同じ神であると見なされる名を持つ神です。唯一の例外はイースト・サクソン王の系図で，それはシクスノト Seaxnot に由来させ

ていますが，それもまた神です。これらの系図はマーシアのリッチフィールドに見られる九世紀の手稿本に始まります[17: 18]。

しかしベーダは，イングランド人の大半がキリスト教に改宗したのち約一世紀を経た七三一年に書かれた，彼の「イングランド国民の教会史」において[5（巻1，第15章）]，ケントの国王の子孫を辿る系図をウォーデンにまで遡らせて描いています。その時代のキリスト教徒の書き手が，不都合な事実であるとの注釈無しにこのような書き方をしているという事実は，神に由来する国王がその直前までの時代に何らかの現実としての意義を有するものであったのか否かについて，一つの疑問を提起します。

九世紀には，『アングロ・サクソン年代記』が，ウォーデンにまで遡り，さらにウォーデンを越えて箱船のノアの息子の一人にまで遡らせる，つまり結果的には聖書的起源のウエスト・サクソン王の系図を載せています[19（A版，855年の条）: 20]。これもまたウォーデンの子孫がイングランドでは異教の神に由来するものと理解されていたのか否か，或いはウォーデンは，その神としての意義は既に忘れられていた神話上の先祖の名前にすぎなかったのか否かについて，別の疑問を提起しています[21]。

七世紀のフランク人の書き手フレデガールは，フランク族の国王家系であるメロヴィング家の起源を次のような用語で描いています。

> 言われているところでは，ある夏，クロディオンが妻と海辺にいたとき，妻が昼時に水浴びをしていると，ネプチューンの怪物にさらわれた。…その後妻は夫のか或いは怪物のかいずれかの子を孕んだ。そして生まれたのはメロヴィクである。彼にちなんでフランク族の国王たちはメロヴィング一族と名付けられた。

外見的にはこの話が示唆しているのは，メロヴィング家の王たちが神に由来しているということです。そしてこの王家の名前の上での名祖に当たるメロヴィクの父としての「ネプチューンの怪物」が，獣の外観を持つ神であったことを暗示しています。そのラテン語のテキストにある aut… aut…（either … or）という語が，「怪物のそして／または彼女の夫によって」という意味で用いら

れる場合の曖昧さは現実的な問題であり，その用語自体においてさえ，証拠としては不明確であるという余地を残します。

その話はまた，あたかもそれがゲルマンの異教主義と同じように，それが古典における説明，例えばエウローペーを連れ去った雄牛として海から現れたゼウス神というような説明，に似ているという理由で，古典の神話体系に由来するかのようにも聞こえます。フレデガールのテキストでは，「ネプチューンの怪物」と注釈されており，そのことも上記の解釈を示唆しています[22(594頁); 15; 16]。

ランゴバルド族時代のイタリアでは，八世紀のパウルス・ディアコーヌス Paul the Deacon はランゴバルド族の初期の国王について次のような話を伝えています。一匹の雌オオカミが七人の少年を産みその子らを池に投げおぼれさせた。アゲルムンド王が通りかかりそのうち一人を救い，その子は成長して国王になった。この話に付加された意義は，雌オオカミという語の持つ意味にかかっています。それは「娼婦」を意味するのかも知れません。しかし王権の異教起源にとってはより重要な意義があります。もしそれが「雌犬」というもう一つの意味を持つのであれば，そしてその場合，lupa という語がいくつかの史料では雌オオカミとして登場する女神フレアであるという議論をする研究者もいますので[15; 16]。

スカンディナヴィアでは，おそらく九世紀のイングリンガタルは吟遊詩人の詩ですが，フィヨルニルにまで遡るスカンディナヴィア人の国王二七人のリストを載せています。スノッリ・ストゥルソン(一三世紀に活躍しましたが)は，フィヨルニルはおそらく異教の神であったイングヴィ＝フレイエ王の息子であったと述べています。彼はさらに，スウェーデンの最初の三人の支配者はこのフィヨルニルと，オーディンとニオルスルであったとも述べています。このうちあとの二人は，神であったことは確かですから，フィヨルニルもおそらく神だったのでしょう。ターヴィル・ピータ Turvill-Petre 氏の熱意にも拘わらず，スノッリが自分のいっていることを本当に理解していたか否かはとても疑わしいのです[23]。イングリンガタルの序章にあたる部分はこの箇所の情報を伝えており，スノッリにも知られていたと思われるのですが，しかし今は失われて

います[15; 16]。

王や王家の構成員たちが持つ聖性の象徴としての長髪もまた，学問的関心を集めてきました。特にメロヴィング期のガリア人については，六世紀のトゥールのグレゴリウスの『フランク人の歴史』の第二巻第九章の次の箇所を参照してください。

> そこで，彼らは川を渡り，テューリンギアを横断し，それぞれの田園地域や都市域ごとに，その地の諸民族のうちで最も抜きんでた高貴な家系から長髪の国王（rege criniti）を擁立した[3（巻2，第9章）]。

フランク族の王が実際に長髪をたくわえていたことは，トゥールネにある五世紀後期のフランク人国王の墓から発見されたキルデリクの認印付き指輪の，おそらくは王の職務の象徴としての長髪を帯びた支配者像を見れば，確認できます[24]。このような長髪が王権の重要な表象であったということは，剃髪や時には皮剥がし（decalvatus の語が使用されています）が，王を廃位したり，その職に資格なきことを示すための行為であったことを示唆しています。例えば，トゥールのグレゴリウスの「フランク人の歴史」の第三巻第一八章。国王キルデベルトとロタールは彼らの義姉妹がその子のために王位を請求することを阻止する目的で，彼らの甥を殺害したのです。彼らは刀と鋏を持たせて殺害者を送り出し，甥を殺すかその髪を切れと脅しました（すなわち王位にふさわしからぬ者にするために）。義姉妹は次のように述べます。

「もしこの子が王位に就けないものなら，髪を切られるよりは死んでいた方がましです。」

という訳で殺害者はその子を殺したのです[3（巻3，第18章）]。

さらなる例は七五一年，カロリング家の初代国王ピピンによるメロヴィング家最後の国王キルデリク三世の廃位でありましょう。キルデリクは剃髪され，修道院へ入れられたのです。そしてもちろん彼の髪は切られました。剃髪は彼を王位にふさわしからぬ者にするための手段であったのか，それともむしろ彼を修道院に入れるための必要事項であったのかは明確ではありませんが[25]。

この証拠にはもちろんある重要事項が含まれています。彼らの髪が再び生え

てはこないことが重要なのです。もちろん一般的にいえば，長髪が権力の表象と見なされ得るということはあったかも知れません。（例えば旧約聖書のサムソンとデリラの話のように）しかしその反対に中世には聖職者の剃髪が，出家の際に世俗的権力を放棄することの証拠と見なされたのも事実です[26]。一方長髪はメロヴィング家の国王が旧形式を固守していただけのことを示す（ウォリス＝ヘイドリルが見なしたように）のかも知れません。というのは，北西ドイツのシュレスヴィヒの沼地で発掘された中によく保存されていた一世紀の人体がはやしていたように，長い髪の例が見られるからです[27（図版1）]。また一世紀のタキトゥスが「ゲルマニア」の中で言及している結び目 knot にも注目してください[28（第27章）]。国王にとっての長髪の習慣について，他の地域，またのちのゲルマン人の王国には殆ど例がありません。そのことはそれが王権にとっての必須事項であったという議論を弱めています。例えば東ゴート族の王テオドリックは短い髪（いわゆる「プディング型」カット）の代表例です。そして例を挙げることの出来るカロリング家の国王たちは，もちろん長髪ではありません。（例えば870年に死んだシャルル禿頭王のように。）[29（図版7）：30（図版37）]

第二の論点に移ります。ネミの王が跡を狙うものによって殺されたように，王は犠牲者となったのか否かという点です。国王が宗教的様式で犠牲者となったという考えについての，最も徹底した言及はチェイニーのものであります[18，第3章]。それはスカンディナヴィアのサガから証拠を引用しています。これに関する国王はスカンディナヴィア史上の異教時代に属し，一一世紀におけるキリスト教への改宗以前のことであります。

スカンディナヴィアのサガに証拠があり，その中では国王は出来が悪いと，例えば凶作とかになると犠牲にされます。早くても一二・一三世紀という，もっと後の時代のサガになると，これを王権の犠牲的要素をまともに示す証拠と見なすことへの障碍となります。しかしチェイニー説の真の焦点は，アングロ・サクソン時代のイングランドに向けられています。該当箇所で彼はノーサンブリア王オズワルド（七世紀頃）に関心を向けています。

ノーサンブリア王のオズワルドはキリスト教徒で，彼の王国の改宗に決定的

な力を持ったのですが，六四二年に異教徒のマーシア王ペンダにうち負かされました。ペンダは彼の首と腕を切り，戦場の杭に串刺しにしました。おそらくウォーデンへの犠牲として。国王の身体の各部や切り刻まれた身体は，戦場から別々に集められ拡散する信仰の対象を形成したのです。そのような例に関して機能した奇蹟のいくつかは異教的色合いを持つ者としても見なされうるでしょう。（例えば，オズワルドが倒れて安置された場所から取った土の混じった水を飲むこと）[31: 32]

さて，これらの行いについて非キリスト教的なことは特にはなく，聖遺物に関するキリスト教的信仰の単純な表明と見なされうるでしょう。しかし他方，戦場からのオズワルドの遺物の拾い集めについての，一二世紀のダラムのレジナルドの説明があり，それは（不吉な）ワタリガラスや（毒草の）トネリコを特徴としているのです。（両方とも異教の神ウォーデンにとっては聖なるものでした。）従ってチェイニーにとっては，オズワルドは犠牲となった王の一例ではなくなり，フレイザーが彼の古典的人類学研究の中で同定した王なのかも知れません[18]。

チェイニーに依れば，第二の例はノーサンブリア王エドウィンです。ノーサンブリア王エドウィンはかれの王国のキリスト教への改宗において最初の段階に力のあったキリスト教徒ですが，オズワルドと同じく，戦場で殺され(633年)ました。しかし彼の場合には的はキリスト教徒のブリトン人の王でした。オズワルドの場合と似ているのは，彼の死体が戦場から集められ，ウィットビーの修道院に安置されたことです。そして彼の頭部は別にヨーク・ミンスターに安置されました。（チェイニーが述べるように）この場合にもまた，犠牲となった国王として見なされた王の，表面的なキリスト教化と見なしているといえるかも知れません。あるいは我々は，その説明が，全く聖遺物のキリスト教的信仰のうちに入るものとして見ることが出来るかも知れません[18]。

この関連でより衝撃的なのは，全く世俗的理由で殺された後，明らかにそのころされ方を理由として聖人化され，アングロ・サクソンの一連の王や侯がいたということです[33]。たとえば，マーシア王子ウィグスタンは九世紀初め王家

内の政治的脈絡で殺され，レプトンに安置されました。またイースト・アングリア王エセルベルフトは，同様にマーシア王の宮廷で殺され，八世紀末ヘリフォードに安置されています。さらにノーサンブリアのエセルウォルドは，八世紀末にハドリアヌス長城付近の王の村で殺され，彼の死体は信仰対象にされました。そしてマーシアの王子エアルドゥルフは八世紀末に殺され，レスタシァのブリードゥン・オン・ザ・ヒルの修道院に聖人として安置されています。

オズワルド王やエドウィン王の例に見られるように，これらの例が少なくとも犠牲となった王への信仰の反響であると見なし得るでしょう。そしてこれら王家の人々がそのような異教的理念に適合的な形で犠牲となったと見なしうるでしょう。その場合，我々にまで伝わっている殺害の説明，それは国王をキリスト教の聖人として表現しているのですが，それは教会が人々を教化し，王権に関する異教的信仰と折り合いを付けようとしているものと見なせるでしょう。他方，そのような犠牲者を聖人と見なすことは，全く聖人信仰の関するキリスト教の慣習や信仰の範囲のうちに入るものかも知れません。その関係でいえば，このような殺害された王家の聖人は劇的な騒乱や政治的不安定期に現れています。一九八三年に議論されたように(33; 34をも参照)，七八六年に教皇特使によりイングランドで開催された教会会議は特に，国王の神に対する関係を強調しましたし，「塗油された国王に触れるなかれ」という聖書の箇所をあげて国王への攻撃を禁じたのです。こうして犠牲者となった国王を聖人となすことは，教会の教化を強める一方法と見なされたといえるのです。

大陸での例は少ないのですが，にも拘わらず殺された国王を尊ぶ伝統は存在したといえます。例えば，フランク族の国王ジギスムントは彼の妻と子供たちによって井戸に沈められ，その後聖人と見なされました。またボヘミア王ヴェンセスラスは一〇世紀末殺され，その後，聖人と見なされました(35)。

しかしながら全体として我々は，殉教者見なされることになった国王の，暴力的最期に関連したキリスト教の聖人信仰の発展を見てきたように思われます。しかし史料がキリスト教徒の筆者のものばかりなので，フレイザーの挙げる種類の犠牲となった国王に関連した，異教的要素に被いをかけてきた可能性

は残ります。

第三の論点に移ります。女神と結婚する国王という論点です。そのような王がいたという証拠は大部分，アイルランド由来のものです。

特にジェラルド・オヴ・ウェールズは，一二世紀の『アイルランド史と地誌』の中でケネルクニルという場所での，王の即位について説明しています。彼に依れば，それは次のような内容です。

> アルスターの深奥北部のケネルクニルという地に，全く風変わりで忌まわしい儀式でもって国王を任命する慣習を持つ人々がいる。その地の人々全てがある場所に集まると，会衆の前に一人の白い雌馬が連れ出される。就任させられることになる予定のその男は・・衆人の前でその雌馬と獣の交わりをし，自分も獣になると告白する。その後その雌馬はその場で殺され，切り刻まれて煮沸される。その後その男のために浴槽が用意され，その湯が入れられる。彼はその風呂に座って，周りを会衆が取り囲む。そして彼も会衆も全てが，煮沸された馬の肉が運ばれるとそれを食べる。彼は自分が浴した風呂の肉汁の入った湯をがぶ飲みする，コップや手を使わず，自分の周りのブイヨン湯に自らの口を浸して飲む。この邪悪な儀式が行われたら，彼が国王であり主権者であることが告白される[36]。

これはまさにフレイザー説の国王の要素を備えています。すなわち，動物の形をした女神との結婚，その動物の肉でもって，この儀式はその王が動物の肉との交感的な融合に至った過程を暗示しようとしているように思えます。このような要素の痕跡は，アイルランドの詩と物語，たとえば「王のサイクル劇」にも，見出しうるかも知れません。例えば次のような例です。

> タラとアイルランドの国王はある朝タラの墨壁に上り，彼のドルイドたちと filid（詩人？）がついていく。彼がある石を踏むとそれが叫ぶ。ドルイドがこれは Tal であると告げる。その石は彼の家系の何人がアイルランドを支配するのか，その数を予言していると告げる。その後霧が降りその中から一人の騎馬者が現れる。彼は国王をある穴へと連れ込み，その中には一人の美しい女性がエールの入った容器の傍らに座り，そばにはすばら

しい戦士がいて，その人はLug神である。その女性は国王に飲み物を捧げ，彼の後継者の名を告げる。その後，その穴は消え，国王が容器を手にしている[37]。

この例や，ケネルクニルでの王の即位についてのジェラルドが挙げる証拠は，比較的後の時代のものであり，その価値評価については困難です。ケネルクニルの場合，そのような儀式はジェラルドが示唆するように，一二世紀にアイルランドで実際に行われたのか否か，信じがたいところです。何故ならアイルランドはずっと以前からキリスト教化された地域であったからです。

さらには，アイルランドの王たちが王位に就く場所，それは上記の例にも出てくるタラであり，もう一つはナヴァン・フォートですが，そこからの地誌学的或いは考古学的証拠についても，曖昧さが残ります。アイルランドの場合は，それらの場所がキリスト教以前の遺跡であると示すことは可能です。特にナヴァン・フォートでは，大きな木造構築物があって，形を持った石灰石で充填され，その後それが焼かれてプラットフォームのみ残されます。全てが儀式めいており，おそらく異教的です。しかし考古学的証拠の年代確定は大まかにいって石器時代のものです。そして我々の知る記述史料における国王の就任のための場所としてこれらが使われたこととは直接の結びつきはありません。エイチャスン Aitchison（1994年刊）はそれらは，古代の遺跡として政治的象徴ゆえに選ばれたのであって，国王の就任に結びつけられる，当時の異教的信仰の故ではないであろう，と考えています[38: 37]。

第四の論点に移ります。他方七世紀初期のサフォークのサトン・フーの有名な埋葬用の土盛り（船墓）は，異教的神と密接に結びつけられる国王としての最も衝撃的な証拠の例であります。

土盛り1として知られる埋葬土墨は最大のもので，一九三九年に初めて発掘されました。それは殆ど盗掘されておらず，死体は（土に溶けていましたが）大きく圧倒的な船の上に置かれ，副葬品や六三〇年代（イングランドでは改宗当初の時期です）の貨幣も多数発掘されました[39: 40]。その墓の副葬品はキリスト教の諸要素を示していますが，（例えば洗礼用のスプーンとか）それでも

中には，おそらく非キリスト教的脈絡のものもあります。（例えば副葬品を積んだ船とか）

被葬者が誰であるかについて，それが国王であるということは一般に支持されています。一つには埋葬の華麗さゆえにであり，また一つには王の表象とも解されうる三つの副葬品の故にであります。その一つは丹精込めて作られ，華やかに装飾されたヘルメット（兜）であります。おそらくこれは国王の頭飾りで王冠の先駆形態でありましょう。王冠はカロリング時代に初めて現れたものですから[41]。兜をかたどった遺品の飾り板には明らかに異教的要素があります。注目すべきはそれが裸形の男性像であり，ウォーデン信仰に帰せられるものかも知れないからです。第二の副葬品は旗です。この遺物の役割については大いに議論があり[42] それでもそれは何らかの種類の国王の旗である可能性はあります。頭部が動物になっていることも，意義からいえば異教的です。三つ目は砥石の王笏です。マイクル・エンライトの最近の非常に刺激的な出版物[13]に依拠しつつ，今回はこれに焦点を当てて論じたいのです。

砥石はそれまでには使われてはいなかったので，実際的な使用というより儀式的なものであり，砥石はケルトの異教では格別の意義を持っているとエンライトは述べ，初期アイルランドにおける類似品とこの砥石との関連性に注目しています。ここではそれに関する諸論点を考察する価値があります。

先ず第一にその砥石の土台は，椅子に座った人物の膝の上に置かれるように意図されていたと考えられます。そのことは，それが玉座に着いた国王が使用するレガリアの一つであったとの想定を支持します。第二にエンライトが特別の注意を払うのは石に彫刻された頭部です。彼の解釈ではそれは切り取られたもので，首切りという異教信仰と結びつけられ，この信仰は特にアイルランドでは顕著であるというのです[43]。そしてフランスのエクス・アン・プロヴァンス近くのガリアの遺跡から出土した首切りされた大量の頭骨の彫刻物は，生き生きとこのことを示しているというのです。さらには，紀元前一世紀のディオドルス・シクルスは，ケルト人が殺害した敵の頭部に防腐処理をして櫃に収めたと述べています。また八世紀のアイルランドのテキストのある一節によれ

ば，切り取られた頭部は祭祀における儀礼的機能を持ったと述べています。すなわちある戦士が祭祀の席に，切り取られたばかりの頭部をもたらすために，人殺しに出かけたという箇所です。

第三の証拠はその砥石の頂点を飾る牡鹿と指輪です。エンライトが示すように，ケルトの異教的伝統においては牡鹿が特に重要です。彼はまた，その形の様式は，ケルトの金属作品の他の品々の様式でもあるといっています。彼にとって，輪はそれ自体太陽のシンボルであり，（例えばドイツのモーゼル地域のバス・コンツに見られる儀式では，輪が太陽を表すものとして火にくべられます）また牡鹿の下に輪を垂れ下がらせた図案は回転させることが出来，それをエンライトは，回転する輪が地球の周りを回る太陽を象徴するので，太陽神崇拝を示唆するものと論じているのです，そして彼はさらに注記して，牡鹿を太陽に結びつける（北イタリアの）ヴァル・カモニカで発見されたケルトの題材を挙げています。従ってそれは王権と異教的な太陽信仰との関連性の証拠だというのです。

それでエンライトにとっては，砥石は古代の異教的ケルトの背景の中では，初期中世の王権の起源の証拠であるのです。彼にとっては王笏に最も近く並行するものは，現在ドイツのトレヴェリ地域にある，紀元前400年ごろのファルツフェルトの彫刻された石の柱なのです。それは遙かに大きく，砥石でさえありませんが，その装飾や概念においては顕著な類似例であり，エンライト説においてはそれは，サトン・フーの砥石に代表される王権の起源についての彼の議論を支持するものとして使われています。

上に述べた総てのことに照らしてみると，初期中世の王権の異教的起源の証拠はどの場合においても問題を含んでいることは明らかです。それはジェラルド・オヴ・ウェールズやアイルランドの物語のように信憑性において疑わしい資料を含んでいます。また西欧の周辺地域に由来する題材を含むため，主流を為すものか否か何ともいえません。またそれは微妙な程度差を持つ解釈，或いは重大な冒険的解釈を含んでいます。しかし我々が扱う記述史料の圧倒的部分は，キリスト教徒の筆者が王権という制度についての異教的要素を覆い隠した

いという意図を持って書いたものであり，教会が王権という制度を取り入れ，それ自身のものとして強力に形成しようとしていたのである，ということを覚えておかねばなりません。また我々は国王というものは，西欧では異教時代に初めて我々の知る記録の中に現れ，その結果少なくとも，王権が異教的意味合いを含み，キリスト教時代になっての地もその意味合いを保ち続けたということも，覚えておく必要があります。このことを知ったならば，我々が持つ証拠の多さに強く印象づけられるのであり，その証拠の難しさに圧倒されることはありません。

では次に，初期中世ヨーロッパにおいて我々が見るような形で，王権を形作り結果的には創造したといえるのは，ローマ人であるという仮説を検討することにしましょう。

我々はローマ帝国時代のローマ人が「国王」という言葉で何を理解していたのかという，補助的な問題から始める必要があります。この点で，ローマ時代の代表的著作家が，特定の王たちをどのように描いていたかを見ることは意味があります。その最初の例として，リーウィウス（紀元前59～後17年）がローマの最初の支配者として，その創立時からローマ共和政の開始時に至るまでについて，書いているところから始めましょう。もちろんこれらの王はローマの創立者であるロームルス（紀元前771～717年）と，レムス（紀元前771～753年）から始まります。これらの国王やその後継者について，リーウィウスが真実の情報を持っていたことはありそうにないことです。彼は明らかに伝説であるものが多く，例えばロームルスとレムスが雌オオカミから授乳されたという話，を中継したのです。しかし我々の議論において非常に印象的なのは，彼がこれらの国王を，あたかもローマ共和政に倣って権力を帯びた，アウグストゥスに始まるローマ皇帝たちの如くに描いたことです。リーウィウスによればロームルスとレムスは彼らの祖父であるヌミトルの承認によって国王と認められたのであり，彼に対して「彼らは集会の只中を行進するとき」に挨拶を送ったのです。彼らの行動は全人民によって賛同され，会衆は声をそろえて国王としての称号と統治権とを承認したのです。あるのちの国王，つまりタルクィニウス・

プリースクス（紀元前616～579年）は，共和政以後のローマ皇帝としてより色濃く描き出されています。というのはリーウィウスによれば，彼はローマの勝利を祝い，紫と金色のロウブをまとい四頭立て馬車に乗せられていた最初の人物です。端的に言えばリーウィウスの描くローマ初期の国王は，世襲ではなく選出されたのです。そして皇帝と同じように儀式や祭典を楽しみました。そのことは実際には，リーウィウスが，初期ローマ史のこの時代まで遡って皇帝職について彼が知っていることを，先取りして描いたということを示唆しています。にも拘わらず，彼の作品は，ローマ人が国王たる者は如何にあるべきかについての明確な理念を持っていたことを示しています(44)。

ローマ共和政時代における王権への態度は発展するにつれ，国王とか皇帝とかの支配を避けようとする熱意によって特徴づけられます。ユーリウス・カエサルへの反感とか殺害とかはこの感情から生まれたものです。しかし，イタリアの外へ向かっての軍事的拡大の際には，ローマ人は軍事指揮者と契約を結ぶに至るのですが，彼らはその人物を国王として認識することになります。このことはユーリウス・カエサルの指揮の下に行われた，特にガリアへの，領土的拡大の文脈の中では顕著です。その戦役については彼の書物である『ガリア戦記』に記述されています(45)。しかし同じことは，皇帝アウグストゥス時代（後14年没）に始まる帝政ローマにおいて明らかになります。ローマ軍はさらなる領土拡大に忙殺されるようになり，例えばトラヤヌス帝（99-117年）の時代にはドナウ川の北にまで拡大します。またハドリアヌス帝時代（117-138年）にはブリテン島にまで拡大します。この拡大が（ローマ人がそう見なしたように）蛮族に対する戦争を必要とし，彼らとの交渉の必要がでてくると，その一方では，ローマ人は三世紀以後にはますます，ローマ帝国の外側の蛮族からの軍事的圧力への対処に追われます。特に帝国の最前線であった東部への外圧に対してはそうでした。

彼の『ガリア戦記』（巻一，31-53頁）においてユーリウス・カエサルは，紀元前五八年以後に活躍していたアリオウィステッスと呼ばれる軍事指揮者を描き，彼を「ゲルマン人の国王」rex Germanorum と呼んでいます。カエサルの

説明では，この国王はブルグンド族の地ではセークァニーと呼ばれる人々の土地を望み，彼の支持者は遠くから（加勢したのはハルーデース族の四〇〇〇人であったという）やってきました。カエサルの説明において顕著なのは，ローマ元老院がアリオウィステゥスに「国王にして友人」と称号を送ったと述べている点です。その説明が与える証拠によれば，アリオウィステゥスの地位と彼が王権を追求したことは，実にローマ側の外交戦略の結果であると同時に，彼が既に帯びていたそれ以前からの役職の結果でもあるということです。実際，我々が感じ取れるのは，アリオウィステゥスが異なる種族の人々からの支持を得ていたという事実は彼が，一方ではローマ軍の軍事的圧力に対する対抗者としてその地位を勝ち得ていたと見なしうると同時に，他方では，ローマ元老院の側における外交的介入を通してそれを達成したとも見なし得る可能性を濃くするのです。

カエサルより約一世紀のち，ローマ人の著作家であるタキトゥス（56頃-117年頃）も，ゲルマン人の国王について報告しており，ローマ人は軍事的拡大の過程でその国王と接するに至ったと見ています。彼の『年代記』によれば，紀元一七年の活動についてはマロボドゥウスと呼ばれる軍事指揮者について記録し，彼をタキトゥスはスエービー族の国王であり，国王の本拠と王の財産を持つと述べています。タキトゥスの述べることからは，彼が王家の血筋を引くものであろう，ということも明らかです[46: 47]。

さらにタキトゥスは次のようにも伝えています。同じ頃，アルミーニウス（紀元後21年没）という軍事指揮者が一二年間権力の座にあり，その部族 gentes 全体を率い，彼の甥は「王家の血筋」に属していた，というのです。しかしアルミーニウスは自らを国王と呼んだことはなかったのですが，ローマ人は彼をそのような存在と見なしていました。この例は国王と呼ばれることは，何ら中の古くからの伝統的役職を保持していることというよりも，ローマの外交的政策の産物（アリオウィステゥスの場合のように元老院によって与えられたもの）である可能性があることを，示唆します。

少し後の叙述の中でタキトゥスはユーリウス・キーウィーリスの説明を行

い，彼が紀元六一年にローマ人に対してバターヴィー族と呼ばれる部族による反乱の指揮者であると伝えています。タキトゥスが我々に教えているところに拠れば，彼はローマの教育を受けた家系の出身で，（彼の名のローマ的特徴に気づくべきでしょう）このことから，彼の王権が何らかのローマの影響の産物である可能性があります。他方我々は，タキトゥスに拠りつつ，彼が蛮族のやり方で宣誓をして通過儀礼を行い，決してローマ的ではない様式の髪型であった，つまり長く赤く染めていたことに注目すべきです。

四世紀後半へと時代を移すと，ローマ人著作家マルケリヌス・アンミアヌスがその後期帝政ローマに関する作品の中で，ゴート族の王アタナリックについて記述しています。その人物の地位はドナウ川以北のゴート族全体の指揮者であり，その地位はローマ人によるゴート人への軍事的圧迫に直面して発生し，その意味で，ローマの活動の産物であるといえると思われます。アタナリックに関しては，ゲルマン或いはゴート的王権を見ているのか，それとも，ローマ人によって設置された王権という創造物を見ているのか，両義的です。アンミアヌスが語るところでは，彼は東ローマ帝国の首都コンスタンティノープルに，ローマ様式で取り仕切られたすばらしい儀式を持っており，贅沢に埋葬されました[48; 49]。

もし我々がさらに五世紀中葉へと歩みを進めるなら，四四九年にコンスタンティノープルからフン族の王である有名なアッティラの王居住地，それはドナウ川の北，ハンガリー平原というとても離れた場所への使者についての，大変注目すべき説明に出会います。この使者はプリスクスと呼ばれる東ローマの役人によって取り仕切られ，彼はその使節の記述を残しています。その説明を見ても，フン族の支配者という地位がフン族固有の制度なのか，それともローマ人によって間接的に創設された制度なのか，どちらとも決めがたいのです。四四九年にフン族は西ヨーロッパを定期的に侵略し略奪していました。破れたのは四五四年にカタラウヌム平原での戦闘においてのみでした。しかしプリスクスの使節はアッティラと交渉する際，帝国内で起こっていた出来事について実に大変詳細な事実を述べました。特にシルヴァヌスと呼ばれた一人のローマ

人の手に入った，しかしアッティラはそれは自分のものだと主張しているある金の容器について言及しています。さらにプリスクスは，アッティラが驚くほどローマ的な性格の宴会を催しているのを記録しています。

アッティラはローマ的にカウチに横たわって食事し，彼の右手に最賓客を座らせ，彼らのための給仕役を侍らせていました。また食べ物は銀の皿で供されていたのです。アッティラの宮廷でプリスクスはラテン語を使う蛮族の一人と会話をしました。別の史料に拠ればアッティラの秘書オレステスはのちにローマの身分であるパトリキ，及び帝国の兵士の長の称号を帯びたのです。しかも彼の息子ロムルス・アウグストゥルスを四七五年ローマ皇帝にしました[50: 22(139-56頁)]。

もし西欧においてローマ帝国時代に，ローマ人が蛮族の国王とは何であるかを形作ったという証拠があるなら，ローマ人は（そして東ヨーロッパにおいて権力の座に止まり続けた東ローマ人は），その後の時代にも西ヨーロッパに現れた国王を，如何に引き続き形作り得たのでしょうか。西ローマにおいて最後のローマ皇帝，上記のロムルス・アウグストゥルスが廃位されたのちイタリアの支配者は彼を廃した蛮族であり，おそらくはフン族（ママ）のオドアケルでした。今度は彼がゴート族の指揮者テオドリックによってその地位を追われました。彼はゴート族の王テオデミールの息子でしたが，我々はその父がローマ人と親しくつきあっていたことに注目すべきでしょう。というのは彼は東ローマ帝国の北部辺境領の総督というローマ官職に就いていたからです。その上，テオドリック自身は人質としてコンスタンティノープルへ送られており，幼少時代をそこで過ごしたからです。彼は父の死後ゴート族の王となり，その後，東ローマ皇帝ゼノンによって四八八年にオドアケルを攻撃するためにイタリアへ送られました。まず最初に彼はオドアケルと同盟したのですが，それに続いて彼を宴会へと誘い，殺して，自らがイタリア王となりました。

彼の経歴からは，彼が帯びた王権とはまさにローマ的で，これこそ我々が見出したものである，ということを想像しうるかも知れません。彼は法律を公布し，ローマ的様式で助言者を任命しました。東ローマのそれに似た宮廷を持ち，先の帝国の中心地であったラヴェンナに彼の王宮を建てました。ローマ的様式

で皇帝の勝利と儀式を祝い，ハドリアヌス帝の墓に類似したローマにある大きな墓に葬られました。のち中世にそれはカステル・サン・タンジェロへと発展したのです。テオドリックの王権は実質的にローマ的であるというように見えます[51]。

J. M. ウォリス＝ヘイドリルは，全体としてはゲルマン起源の王権のローマの影響を受けての発展という図式を好むのですが，にも拘わらず，テオドリックの支配には現実にはゲルマン的要素があったかも知れないという考えをもてあそんでいます。このことはオットー・ヘフラーによる最も発展した形の表現の中に示されています。彼は九世紀スカンディナヴィアのレークストンのルーン文字の下記の有名な刻字を次のように解読しています。すなわち，ルーンの支配者であるヴァリンが，彼の息子ヴェモッドが二〇人の海賊王たちの手により殺されたことの仕返しを期待して，彼の別の息子をテオドリックに人質として差しだしたというものです。

テオドリック。剛胆
海戦士たちの王が
統治したのは
リイド海の沿岸で
今，彼が武装して跨るのは
ゴシック式の馬の上で
盾は革ひもでくくられ
ミーリングズの保護者だ。

ヘフラーの解釈によれば，これはテオドリックの王権としては，一層ゲルマン的で，非ローマ的な核心部分が実際にはあり，また王はその死後も長く，その帰依者に対して復讐をなしうる神と見なされたという警告です。ヘフラーはテオドリックについての中世後期の伝説の発展を引用しています。そして彼はこれらの例を，テオドリックの王権の核心が異教的であったという，彼の議論を補強する一連のスカンディナヴィアやゲルマンの話と結びつけています[11]。しかしその証拠はテオドリックの時代より遙かに後のものであり，テオドリッ

クの王権が何らかの現実性の上に形成されたと信じる，如何なる実際的な理由もありません。たとえそれが彼についての後の時代の信仰に何らかの光を当てるとしても。

西ゴート族の集団は四世紀後半から東ローマ帝国に侵入しました。三七八年にはアドリアノープルの戦いでローマ軍に対する西ゴート族の大きな勝利がありました。五世紀初めにはアラリックが西ゴート族の「国王」となり，イタリアに侵入し，四一〇年にローマ市を略奪し，その後同じ年に死にました。彼に取って代わったのは兄弟のアタウルフで，彼の支配下で西ゴート族は南西ガリアのアキテーヌに定着したのです。その地でアタウルフは四一四年に西ローマ皇帝だったホノリウスの妹であるガッラ・プラキディアと結婚するのです。この結婚は当時のローマ人歴史家オロシウスによっても記述され，彼はアタウルフの演説について，説明の意味するものを一語一語記述しています。

> 私は経験から，私のもとのゴート人が，法に従うにはあまりに野卑であるということを知っているが，しかし同時にもし法がなければ，国家は国家たり得ないことも知っている。そこで私は，ローマの名前をゴート人の強さによって回復し増進させることを目指すという光栄を選んだ。従って戦争を避け，平和のために勤める[52]。

その字面では，この演説が示唆するのは，アタウルフの王権観と，ローマ人が優先するものや利害関心との間に大変近しい結びつきがあるということです。というのはローマ法の上に自分の支配を基礎づけたいと望みを表明していること以上に，ローマ的な特徴は無いでありましょうから。しかしありそうにないのは，オロシウスが彼の演説を言葉通りに説明し，その中に表明されている不満は，オロシウスが，アタウルフ自身の意見や意図よりも，ゲルマン人諸王に考えてもらいたいものを反映しているという，可能性の方が高いことでしょう。にも拘わらずオロシウスのこの一節が反映しているイメージは，人目を引くもので，それが示唆するのは，蛮族の支配者がローマ帝国によって完全に影響されていると見なすことについて，全くありそうでないということはない，ということです。

自らをフランク人と呼ぶようになるゲルマン人は，少なくとも四世紀の半ば以後，ライン川下流地方において活躍し，帝国と密接につきあい，特にローマ帝国軍に加わって戦っていました。我々は既に五世紀の王キルデリクの印章指輪について，それが王権のゲルマン的表象としての長髪を持つ姿で表されているという事実と関連させて話しました。ところが，肝心の証拠自体は印章指輪という全くローマ的なものであり，ローマ帝国の統治文書に特有の，明確にローマ的機能を持つものです。そしてそれは（もちろん裏面にではあるが）周囲にChilderici regis（国王キルデリクの）というラテン語の刻字を持っています[24: 53]。

このようなゲルマンの王権に対する強いローマ的影響という印象は，西ローマ帝国の周縁部，かつての属州ブリタニアにおいても明確です。その地域の北部に現れたイングランド人の王国，すなわちノーサンブリア王国には，二つの高度に示唆に富む考古学の発掘箇所があります。一つはローマ軍団の要塞で，のちに建てられたヨーク大聖堂の下に発掘されました。発掘作業の結果，この要塞の中心部にあった本部建物の，大きくて強い印象を与えるバシリカ或いはホールからは，九世紀にまで下る壺が発見されました。発掘者はこれを，そのホールが九世紀まで使われ続けたものと解し，イングランド人のノーサンブリア王の宮殿であったと見なしたのです。もしそうだとすると彼らの王権へのローマ的影響の強さを示し，その王たちは実質的にブリテン公という名称のローマの役人の後継者ということになり，ヨークを拠点にローマ時代のブリテン島を統治していたことになってしまいます。そのホールから発掘された壺の量が，このことを証明するに十分か否かは議論の分かれるところでありましょう。その結果，私が別のところで論じたように異なる解釈の可能性があるでしょう。しかしそれでもなお，その軍団の要塞の第一九塔から発掘された証拠は，イングランド人のノーサンブリア王がローマ人の作った要塞を自らの手で修理していたのかも知れないということを示し得ますから，示唆的なのです。もし国王がブリテン公から，或いは少なくともローマに下属した後継者からその地位を引き継いだとするなら，彼らは，我々が大陸で検証してきたような国王として，

ローマ人の活動の創造物であるという可能性が大いに高まります[54; 55; 56; 57]。

第二の発掘はイーヴァリングにある七世紀のノーサンブリア宮殿の発掘です。その建物の一つはローマ的円形競技場の一部の形です。とはいえ木造ですが。これは少なくともノーサンブリアの王が，ローマ様式に強く影響されていたことを示唆しています[58]。

初期中世王権の性格についてのこのような疑問は，西欧におけるローマ帝国の終焉に関するより広い議論の一部です。かつてそれは政治的また軍事的災厄と見なされていましたが，今では変換過程の一つと見なされるのが一般的です。ヨーロッパ科学基金によるローマ世界の変換という研究計画において具体化されている見方です[59; 例えば60]。その極端な形では，カナダ人の学者であるゴッファート Walter Goffart の考え方に見られ，それに拠れば，西ローマ帝国の後継者としてのゲルマン人王国の創造は，実質的には帝国の政策であり，コンスタンティノープルにいた東ローマ皇帝が主導権をとったというものです[61]。ゴッファートによれば，東の皇帝たちは自分たちが生き残ることは，西の帝国の財政的，軍事的負荷から自らを解放することに，かかっていると見なしていたのです。その負担はまた皇帝の地位を主張する簒奪者たちの出現から生じる，かなりの安全上の脅威を引き起こしていたからです。西の帝国をなくす時の方法は，ゴッファートの説に依れば，ローマの産物であったゲルマン人諸王国として，帝国を解体することだったのです。

本稿の目的は結論に到達することではなく，討論を活発にすることでありましょう。従ってこれまで私がみなさんに提供してきた分析が，以下のようなかなり深く広い論点を喚起したと思われますことを，次のように要約することで結論に代えたいと存じます。

- 西欧におけるローマ帝国の終焉の性格と，ヨーロッパ科学基金研究計画が名付けた「ローマ世界の変換」
- 西欧世界のキリスト教への改宗の性格と，キリスト教会が接触した主要な政治制度の異教的要素を，どの程度吸収し得たのか，その特色。
- 王権の観念と働きや実行における宗教的諸要因が，初期中世やそれに続

いて近代に至る諸世紀間の，程度や性格。

＊本稿では注ではなく，参考文献一覧が示され，本文で引用された箇所にはこの一覧の番号が付されている。

参考文献一覧

（引用順）

（1）B. Krusch, and W. Levison, *Gregory of Tours, Decem Historiarum Libri* (*Monumenta Germaniae Historica, Scriptores Rerum Merovingicarum* 1.1; Hanover, 1951).

（2）R. Buchner (ed.), *Gregory of Tours, Historiarum Libri Decem* (2 vols, Darmstadt, 1955).

（3）L. Thorpe, (ed.), *Gregory of Tours: The History of the Franks* (Harmondsworth, 1974).

（4）C. Plummer (ed.), *Veneabilis Baedae Opera Historia* (2 vols, Oxford, 1896).

（5）B. Colgrave, and R.A.B.Mynors (ed.), *Bede's Ecclesiastical History of the English People* (revised ed., Oxford Medieval Texts; Oxford, 1991).

（6）D. A. Binchy, *Celtic and Anglo-Saxon Kingship* (Oxford, 1970).

（7）F. J. Byrne, *Irish Kings and High-Kings* (Dublin, 1973).

（8）F. J. Byrne, *Irish Kingship and High Kingship in the Early Middle Ages* (Woodbridge, 1995).

（9）T. M. Charles-Edwards, *Early Christian Ireland* (Cambridge, 2000).

（10）P. H. Sawyer, and B. Sawyer, *Medieval Scandinavia: From Conversion to Reformation* 800-1500 (Mineapolis, 1993).

（11）J. M. Wallace-Hadrill, *Early Germanic Kingship in England and on the Continent* (Oxford, 1971).

（12）M. J.Enright, *Lady with a Mead Cup: Ritual, Prophecy and Lordship in the European Warband from La Tene to the Viking Age* (Dublin, 1996).

（13）M. J. Enright, *The Sutton Hoo Sceptre and the Roots of Celtic Kingship Theory* (Dublin, 2006).

（14）J. G. Frazer, *The Golden Bough: a Study in Comperative Religion* (2 vols, London, 1890).

（15）R. W. McTurk, 'Social Kingship in Ancient Scandinavia: a Review of Some Recent Writings', *Saga-Book: Viking Society for Northern Research*, 19. 2-3 (1975-6), 139-69.

（16）R. W. McTurk, 'Scandinavian Sacral Kingship Revisited', *Saga-Books: Viking Society for Northern Research*, 24.1 (1994), 19-32.

（17）D. N. Dumville, 'The Anglian Collection of Royal Genealogies and Regnal Lists', *Angl-Saxon England*, 5 (1976), 23-50.

(18) W. A. Chaney, *The Cult of Kingship in Anglo-Saxon England* (Manchester, 1970).

(19) C. Plummer (ed.), *Two of the Saxon Chronicles Parallel with Supplementary Extracts from the Others* (2 vols, Oxford, 1892-9).

(20) J. M. Bately (ed.), *MS* A (The Anglo-Saxon Chronicle: A Collaborative Edition; Woodbridge, 1986).

(21) E. John, 'The Point of Woden', *Anglo-Saxon Studies in Archaeology and History*, 5 (1992), 127-34.

(22) A. C. Murray, (ed.), *From Roman to Merovingian Gaul: A Reader* (Letchworth, 1999).

(23) E. O. G. Turville-Petre, *Myth and Religion of the North: The Religion of Ancient Sacandinavia* (London, 1964).

(24) E. James, *The Franks* (Oxford, 1988).

(25) R. McKitterick, *The Frankish Kingdoms under the Calolingians* 751-987 (London, 1983).

(26) E. James, 'Bede and the Tonsure Question', *Pertia*, 3 (1984), 85-98.

(27) W. Van der Sanden, *Through Nature to Eternity: The Bog Bodies of Northwest Europe*, trans. S.J.Mellor (Amsterdam, 1996).

(28) R. Much (ed.), *Die Germania des Tacitus* (3rd ed., Heidelberg, 1967).

(29) P. Grieson, *Medieval European Coinage with a Catalogue of the Coins in the Fitzwilliam Museum, Cambridge, I, the Early Middle Ages* (5*th*-10*th Centuries*) (Cambridge, 1986).

(30) F. Mutherich, and J.Gaehde, *Calolingian Painting* (London, 1977).

(31) E. Cambridge, and C.Stancliffe (ed.), Oswald: *Northumbrian King to European Saint* (Stamford, 1995).

(32) P. Clemoes, *The Cult of Saint Oswald on the Continent* (Jarrow Lecture; Jarrow, 1983).

(33) D. Rollason, 'The Cult of Murdered Royal Saints in Anglo-Saxon England', *Anglo-Saxon England*, 11 (1983), 1-22.

(34) A.T.Thacker, 'Kings, Saints, and Monasteries in Pre-Viking Mercia', *Midland History*, 10 (1985), 1-25.

(35) G. Klaniczay, Holy Rulers and Blessed Princesses: Dynastic Cults in Medieval Central Europe (Cambridge, 2002).

(36) J. O'Meara (ed.), *Gerald of Wales, the History and Topography of Ireland* (Harmondsworth, 1982).

(37) E. Bhreathnach (ed.), *The Kingship and Landscape of Tara* (Dublin, 2005).

(38) N. B. Aitchison, *Armagh and the Royal Centre in Early Medieval Ireland* (Woodbridge, 1994).

(39) R. Bruce-Mitford, *The Sutton Hoo Ship-Burial* (3 vols, London, 1975-83).

(40) M. O. H. Caver, and A. Evans, *Sutton Hoo: A Seventh-Century Princely Burial Ground and its Context* (London, 2005).

(41) P. E. Schramm, *Herrschaftszeichen und Staatssymbolik: Geitrage zu ihrer Geschichite vom Dritten bis zum Sechzehnten Jahrhundert* (*Schriften der Monumenta Germaniae Historica* 13; 3 vols, Stuttgart, 1954-6).

(42) A. C. Evans, *The Sutton Hoo Ship Burial* (London, 1986).

(43) A. Ross, *Pagan Celtic Britain: Studies in Iconolography and Tradition* (London and New York, 1967).

(44) B. O. Foster (ed.), *Livy, Ab Urbe Condita in Fourteen Volumes* (14 vols, London, 1986).

(45) C. Hammond (ed.), *Julius Caesar, Seven Commentaries on the Gallic War, with an Eighth Commentary by Aulus Hirtius* (Oxford, 1996).

(46) E. Koestermann (ed.), *Cornelius Tacitus, Annalen* (4 vols, Heidelberg, 1963-8).

(47) M. Grant (ed.), *Tacitus: The Annals of Imperial Rome* (Penguin Classics; Harmondsworth, 1989).

(48) J. C. Rolfe (ed.), *Ammianus Marcellinus* (3 vols, Loeb Classical Library; London and Cambridge, Mass., 1935-9).

(49) W. Hamilton, and A.Wallace-Hadrill (ed.), *Amminianus Marcellinus: The Later Roman Empire* (*A.D.* 354-378) (Harmondsworth, 1986).

(50) W. Pohl, 'The Regia and the Hering - Barbarian Places of Power', in *Topographies of Power in the Early Middle Ages*, ed, M.De Jong, F.Theuws and C.Van Rhijn (Transformation of the Roman World 6, Leiden, 2001), pp.436-66.

(51) J. Moorhead, *Thedoric in Italy* (Oxford University Press, 1992).

(52) M. P. Arnaud-Lindet (ed.), *Orosius Histories* (*Contre les Paiens*) (3 vols, Paris, 1990-1).

(53) I. N . Wood, *The Merovingian Kingdoms* 450-751 (London, 1994).

(54) D. Phillips, B.Heywood, and M.O.H. Carver, *Excavations at York Minster: Volume I: From Fortress to Norman Cathedral* (London, 1995).

(55) D. Rollason, 'Historical Evidence for Anglican York', in *Anglican York* (A.D. 410-876) : *A Study of the Evidence*, ed. D. Tweddle, J. Moulden and E. Logan (Archaeology of York, York, 1999).

(56) D. Rollason, *Northumbria* 500-1100*: Creation and Destruction of a Kingdom* (Cambridge, 2003).

(57) P. C. Buckland, 'The " Anglican Tower" and the Use of Jurassic Limestone in York', in *Archaeological Papers from York Presented to M.W. Barley*, ed., P.V. Addyman and V.E.Black (York, 1984), pp.51-57.

(58) B. Hope-Taylor, *Yeavering: An Anglo-British Centre of Early Northumbria* (London, 1977).
(59) L. Webster, and M. P. Brown (ed.), *The Transformation of the Roman World* (London, 1997).
(60) F. Theuws and J. L. Nelson (ed.), *Rituals of Power: From Late Antiquity to the Early Middle Ages* (*The Transformation of the Roman World*, 8; Leiden, 2000).
(61) W. Goffart, 'Rome, Constantinople and the Barbarians', *American Historical Review*, 86 (1981), 275-306.

解説

英国ダラム大学デイヴィッド・ロラソン教授は，学術振興会の招聘研究者として二〇〇八年四月に来日され，東北大学，早稲田大学，慶應義塾大学，関西大学，広島大学などで講演された。オクスフォード大学ベイリオール・カレッジ卒業後，バーミンガム大学大学院で学位を取得され，コレージ・ド・フランスを経て，一九七七年からはダラム大学に所属し，現在は同大学の人文学部教授を務めておられる。

業績は多岐に渉り，『ダラム伝記集』*Durham Liber Vitae* の編集と校閲，及び解説の執筆と刊行に携わっておられるほか，北部イングランドの歴史書である『諸王の史書』*Historia Regum* の編集を担当しておられる。我が国の研究者にとってよく知られているのは，氏のアングロ・サクソン時代の聖人崇敬に関する研究であり，今回の関西大学でのご講演の内容もその研究に関連している。

関西大学でのご講演は文学部主催の特別講演会として四月二一日に行われ，学内学外から聴衆を迎えた。パワーポイントを駆使して画像や発掘現場の写真を披露しながら行われる講演は，聴衆を魅了した。講演自体は英語で行われ，聴衆には予め日本語要約が配布された。質疑応答は英語で行われた。

本講演の内容を要約すると以下のようになろう。西ヨーロッパにおける王権の起源としてはローマ帝国の外交的，軍事的影響の結果生み出されたという説と，ローマ以前のケルト的或いはゲルマン的異教に由来すると見る説とが並立している。そのうち後者についての研究は史料の少なさ故，文書ではなく，魔

術風習，儀礼，信仰などをよりどころとする人類学的方法を援用せざるを得ない。歴史学者はフレイザーが提起した事例を，文書史料とつき合わせ，歴史事実か否かを検証する。

まず最初に，自己の先祖を神とみなし，それを自らが神であることの根拠にする事例を，イングランド，ガリア，イタリア，スカンディナヴィアに見出すことが出来る。長髪を持つ家系を聖性の証とみなす事例を，トゥールのグレゴリウスの『フランク人の歴史』の中に見出す。しかしその他の地域では反例も多く，説得力が無い。次に王位を狙うものによって犠牲となった国王がその後聖人とみなされる例を，スカンディナヴィア，イングランド，フランク王国に見出す。さらに女神と結婚することを通じて王位を確実にするという事例を，ジェラルド・オヴ・ウェールズの描くアイルランドや，スクーンの石で知られるスコットランドに見出す。最後に，異教の神に由来する王位であるという理由で自己の王位を主張する例として，サトン・フーの船墓を挙げる。特にその埋葬品のうち，兜，旗，砥石の王笏，台，カップ，牝鹿と指輪について新しい解釈示される。

節を変えて，王権がローマ帝国との関係で発生したとみなす学説について検討する。帝国になる前のローマにおいても国王がいた。紀元前後の歴史家リーウィウスによれば，ロームルスとレムスは会衆の歓呼によって国王に選ばれた。カエサルの『ガリア戦記』によれば，ガリアのアリオウィステゥスという軍事指揮者は，異なる種族の人々から指導者としての支持を得ており，それを根拠に，カエサルは彼を国王とみなしている。その後ローマ元老院は彼を国王と呼ぶ。アッティラの秘書オレステスは，ローマの身分であるパトリキとなり，のち帝国の兵士の長の称号を帯びた。このようにローマとの外交関係がゲルマン人の指揮者を国王に仕立てたという説である。

ローマ帝国崩壊以後のゲルマン諸族の国王も，東ローマ帝国宮廷で育てられたテオドリック東ゴート族の国王となった例や，西ゴート族のアタウルフが西ローマ皇帝の妹と結婚し，王になったとき，ローマ法を採用すると述べている例なども，挙げられている。フランクの王キルデリクが印象指輪を用いたが，

これは王の持ち物のローマ的機能の代表例である。イングランドのノーサンブリア王がローマ軍の下級指揮者に由来するとの説も挙げられている。ローマ帝国の影響は崩壊以後にも，国王権の根拠として続いていたのである。

本稿では結論は無く，国王権が存在するようになった二つの契機が学説史整理という形で提示されている。当日の聴衆からは次のような質問があった。京都大学法学部の佐々木健氏から，「今回の発表では，人々の間に国王という存在が何故必要とされるようになったのかという，いわば原理的な側面が触れられていないのではないか」という質問があった。ロラソン教授は，そのことを肯定した上で，それについての研究も平行して進めているとして，講演後に佐々木氏に個別に話をされた。